

ONLY! Jacky Woo

ジャッキー・ウー

VOL.6

映画で伝えるメッセージ

ジャッキー・ウーは役者と監督、両方の立場を行き来する映画人だ。だからこそ、撮影現場の立ち居振る舞いにも自分の信念がある。

「カメラハひとつとつても、1テイク終えるまでに通常なら40分ほどかかる。役者はその間、音声や照明からさまざまな指示が出され、カメラの前で『孤独』になっってしまう。その孤独感から『失敗できない』『迷惑をかけられない』という考えに支配され、思い切った演技ができなくなってしまう。だから僕は、カメラも音声も照明も、役者の心が孤立する前に割って入り、役者に寄り添うこと

海外では役者、日本では監督。ジャッキー・ウーの創作活動には、この2点の決まり事がある。特に監督としては、世界各国の現場を目の当たりにしてきたからこそ、思うことは多々ある。今もこれからも変わらず、譲れない映画人としてのプライド、そして次なる挑戦とは。

取材・文=金澤英恵 撮影=平岩享

スタイリング=檜垣健太郎 (tsujimanagement) メイク= chiSa

美容監修=フェミニンアネックス 鈴木美衣

譲れない映画人としてのプライド、

そして次なる挑戦とは――。



にしています」

数々の現場を踏む中、役者をリスペクトすること、制作側の傲慢を容認しないこと、このふたつを両立させることが何より重要だと悟ったという。

「『いい作品を作ること』を大義名分に、役者の心を無視する制作者があまりに多すぎる。監督やプロデューサーは、ヒットすれば『自分の作品だ』と誇示しますが、そうでない場合は役者のケアもなく、次の作品にクランクインする。映画はそんな不純なものではないでしょう。表現者として感性を言語化し、心が通い合うやりとりをしなければ、決して映画など

作れない。僕は、その点で『優れている』わけではない。けれど、人一倍努力してきた自負はある。カットがかかった瞬間、互いを讀え合うような、リスペクトが行き交う現場を作り続けることは、僕の使命でもあると思っています」

だからジャッキー・ウーは、一度現場を共にした役者のことをその後も気にかける。

『キセキの葉書』(17)の子役は重度の障害者でセリフもない役でしたが、次の作品ではセリフのある役を与えるからガンバレ!と約束し、難しい役をやりきり

ました。「ばあばは、だいじょうぶ」(18)の寺田心くんも同様でまた声をかける予定です。未来進行形で役者との関係性を考え続ける。監督としての役者へのリスペクトとは、本来そうあるべきではないでしょうか」

現在は、フィリピンの連続ドラマに俳優として撮影に臨みつつ、自身初となる舞台、それもミュージカルの製作総指揮と演出にも乗り出した。映画で培った作り手としての矜持を、今度は舞台上で発揮するために――。

「オンリー・ジャッキー・ウー」の活動は、進化と深化の最中である。



2025年1月29日から2月2日まで博品館劇場で上演するジャッキー・ウー・ミュージカル「もう一度抱きしめて」のオーディション風景

ジャッキー・ウー
神奈川県生まれ。中国系二世の父親を持ち、横浜に育つ。96年、香港に渡り映画の世界へ。98年からフィリピンでも活躍、歌手としても成功を収め、台湾、中国、韓国の映画に出演。代表出演映画に「少林キョンシー」(04)など。11年、『ミッション・トゥー・アビス』でハリウッドデビュー。13年、プロデュース&出演作「DEATH MARCH」(13)がカンヌ国際映画祭ある視点部門に出品。以後、イギリスにも拠点を構える。これまで世界各国・地域の映画祭で多くの賞を受賞している。◎「残照のかたに」はAmazon Prime Videoほかで配信中